

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 11 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04657

研究課題名(和文) 大学教養英語教育におけるReciprocal Teachingの授業開発

研究課題名(英文) Development of an English Teaching Method with Reciprocal Teaching for University Students

研究代表者

野村 幸代(NOMURA, SACHIYO)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：90635195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：互惠的教授(Reciprocal Teaching; 以下、RT)を大学教養英語の授業に組み込む指導法を開発し、その効果を検討した。「質問」の活動は、学習者に対して(1)全体ストラテジーを働かせる読みの促進、(2)自己効力感の向上、(3)学習意欲の向上、(4)学習不安の軽減という効果をもたらした。「明確化」の活動は、学習者に対して(1)話し合いにより自分の理解の曖昧さに気づく、(2)他者の発話により語彙理解が促進される、(3)語彙記憶が保持されるという効果をもたらした。RTは、大学教養英語の授業において、アクティブラーニングの視点を反映した指導を行う際に有効な教授法である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究は、RTによって学習者のテキストの理解が著しく改善されたことを示している(Palincsar, 2003; Nation, 2009)。RTは、外国語の読解授業においても効果が期待されているものの(Grabe, 2009)、実証研究が少ない。本研究は、これを日本の大学教養英語において応用し、その効果を検討した。大学の教養英語は基本的に全員必修であるが、学生の学力や意欲の差が大きく、学生が意欲的に取り組むための指導法が模索されている。本研究では、RTによって大学生の自己効力感や学習意欲が向上することが示された。RTが大学教養英語における指導法の1つとなり得ることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：A teaching method with Reciprocal Teaching for university students was developed and effects of this method were examined. "Question generating" and "clarifying" activity in Reciprocal Teaching were effective. Results of questionnaire after this activity showed that "question generating" activity 1) promoted students to read English text with whole strategies, 2) enabled them to have self-efficiency, 3) heightened their study motivation, and 4) reduced their anxiety. "Clarifying" activity 1) gave students the opportunities to ask and teach each other and to monitor self-understanding, 2) prompted their comprehension of vocabularies, and 3) enabled them to keep long memory of vocabularies. These findings showed that the combination of strategy of forming questions and collaborative learning were useful for Japanese university students to learn English.

研究分野：教育学

キーワード：大学教養英語 互惠的教授 協同学習

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマである RT は、ストラテジーを活用し、見通しを持って他者との対話を通してテキストを読み解くという問題解決に取り組む。これは、アクティブ・ラーニングの視点との共通点が多い。しかしながら、この視点からの RT の実証研究は行われておらず、また、大学教育の質的転換としてもアクティブ・ラーニングの導入が求められているが、具体的な指導法の開発やその効果の検証が課題となっている。

2. 研究の目的

互恵的教授 (Reciprocal Teaching; 以下、RT) を大学教養英語の授業に組み込む指導法を開発し、その効果を検討することである。

3. 研究の方法

参加者は地方国立大学の教養英語を受講している 1 年生である。この大学は習熟度別クラスの授業を行っており、参加者の目標として設定されている英文読解力は、CEFR (外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠) の B1 レベルである。

平成 28 年度は 3 クラスを対象に RT の「要約」と「質問」を作成する活動を、平成 29 年度は 2 クラスを対象に「明確化」を行う活動を重点的に授業に組み込んだ。

4. 研究成果

「要約」は、時間外学修として読ませてきたテキスト内容を授業においてグループで検討し、要約文を作成させた。その要約文を質的に分析したが、参加者は個人のテキスト理解の正確さに自信がなく、また、深い読み込みができず、内容の大枠を把握するだけの要約となってしまう。「要約」を行うためには、教師がテキストの内容、英文のレベルと学習者の英語習熟レベルのバランスを精査する必要がある。「予測」に関しては、授業で使用するテキストが大学指定であり、内容が比較的短い説明文が中心であったため、参加者の受講する授業には適さない活動であった。「質問」と「明確化」を授業に組み込んだ方法には成果が見られた。以下、方法と成果を報告する。

(1) 質問

【方法】

3 クラスの 69 名に 4 人一組のグループを作るよう指示し、25 分間、テキスト内容について話し合いながら質問を作成させ、その後、質問紙調査を実施した。参加者には、教師になってテストを作成するつもりで、文章の要点を問う質問をグループで 3 つ作成するように指示した。質問紙調査は 5 段階のリッカートスケールを用いて調査した。「グループで読む利点」と「個人で読む利点」に関しては自由記述回答を求めた。

【成果】

「質問」を作成する活動は、学習者が単語の意味を確認しながら、全体的ストラテジーを働かせてテキストを読むよう促すことが示された。また、学習者に認知的負荷をかけるが、自己効力感を生み出し、さらに、外国語学習者が陥りがちな、単語や1文ずつの意味にこだわりすぎて全体の意味をつかめないという読み方を改善することができ、学習者の学習意欲を高めることができることが示唆された。また、RTは、仲間に質問をしたり、仲間とのやり取りを通して自分の理解をモニターしたり、仲間に教えたりする機会を提供する。加えて、グループメンバーとしての責任感が生まれ、課題に主体的に取り組むようになり、学習者の不安が軽減したことも示された。さらに、「単語や英文の意味を他者に教える機会がある」、「単語の意味を深く理解できる」、また「集中して読める」など、英文読解特有の利点も示された。以上から、RTの「質問」を作成する活動は大学教養英語の授業においても応用可能であり、アクティブ・ラーニングの視点を生かした教授・学習方法であることが示された。

(2) 明確化

【方法】

2クラス(Aクラス18名とBクラス25名)を対象とした。Aクラスの学習者には300字程度の英文を配布し、個人で15分間、未知語や理解が不十分な表現に印をつけさせた。未知語や理解が不十分な表現は意味を推測し、辞書の使用は最小限にとどめるよう指示した。次に、印をつけた語彙に焦点を当てながら、4人から5人のグループで、30分間でテキストの内容を話し合うよう指示した。その際、他のメンバーの未知語を自分が知っている場合、その語彙をわかりやすく説明することと、全員がわからない場合は意味を推測し合って考えるよう指示した。また、BクラスにはAクラスと同じ英文を配布し、45分間で辞書を引きながら読み、テキスト内容を理解するように指示した。両クラスに、1週間後に同じテキストの語彙の選択式の確認テストを実施することを告げた。テストは50点満点で、ランダムに並べられた語彙の選択肢から適切なものを選んでテキストの空欄に補充する形式である。選択肢には10個のダミーを含んでいる。テスト結果は t 検定により分析した。また、AクラスとBクラスの英語力に差がないことを確認するため、授業内容に基づいた到達度テストである定期テストの結果も t 検定により比較した。

【成果】

グループの話し合いの発話分析から、学習者は語彙の意味を推測する際に、自分の理解の曖昧さに気づき検討を行うことと、他者の発話が足場かけとなり、語彙の理解が促進されることが示された。また、Aクラスの学習者の語彙確認テストの結果がBクラスの結果より有意に高かったことから、学習者の語彙記憶の保持にも効果があることが示された。

引用文献

Grabe, W. (2009). *Reading in a second language: Moving from theory to practice*. NY: Cambridge

University Press.

Nation, I. P. (2009). *Teaching ESL / EFL reading and writing*. NY: Routledge.

Palincsar, A.S. (2003). Collaborative approaches to comprehension instruction. In A. P. Sweet & C. E. Snow (Eds). *Rethinking reading comprehension* (pp.99-114). NY: The Guilford Press.

Palincsar, A.S., & Brown, A. L. (1984). Reciprocal teaching of comprehension-fostering and comprehension -monitoring activities. *Cognition and Instruction, 1, 2*, 117-175.

Salehi, M., & Vafakhah, S. (2012). *Reciprocal teaching and language learning strategies: The effect of reciprocal teaching and explicit teaching of strategies*. Saarbrücken: Lambert Academic Publishing.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Sachiyo NOMURA, Atsuko UEDA
2. 発表標題 Effects of Reciprocal Teaching "Forming Questions" on Japanese English Learners' Text Comprehension
3. 学会等名 The 16 th ASIA TEFL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野村幸代
2. 発表標題 互恵的教授によるテキスト内容理解の効果 アクティブ・ラーニングの視点から
3. 学会等名 四国英語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野村幸代
2. 発表標題 互恵的教授が英語語彙力に与える影響
3. 学会等名 教授学習心理学会第13回年会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sachiyo NOMURA, Atsuko Ueda
2. 発表標題 Effects of Collaborative Learning on English Education: Focusing on Incidental Vocabulary Learning
3. 学会等名 the 17th ASIA TEFL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	上田 敦子 (Ueda Atsuko) (30396593)	茨城大学・全学教育機構・准教授 (12101)	